

ベネルクスの旅 ②

～オランダ & ベルギー～

福岡県サイクリング協会理事長

西 島 司 郎

デルフトの名を一躍有名にした淡い青色の陶器は、オランダがスペインの支配下に入った時代にマジョルカ陶器の製法が伝えられたのに始まる。その後、貿易の中心地であったデルフトには、中国や日本から陶磁器がもたらされた。その影響を受け、特に明の藍の染め付けを取り入れ日本の古伊万里の絵付けや柿右衛門風の赤色を模倣し、デルフト

独特の焼き物を作り上げた。パスポート紛失事件で驚愕した私の頭も、展示品を興味深く見ている中に、漸く普通の旅行者に戻って来たようだ。世界最大の港を持つオランダ第二の都市、そしてサッカールの小野伸二選手が入団する一部リーグの名門「フイエノールト」のロッテルダムを通過し、約20km地点にある風車の村「キンデルダイク」へ。国土の半分以上が標高0m以下というオランダは、長い間水浸しの土地を干拓するために闘ってきた。そこで活躍したのが、風車である。

バスが幹線道路より右折し、狭い道をバツクで駐車場へ。ここからは歩きた。1997年にユネスコは、キンデルダイクとエルスハウト間の一帯の風車保存地区を世界遺産に認定した。勿論、自動車は通行禁止だが、これだけ観光客の多い場所、自然がそのまま残されていて、歩いている道路は敢えて未舗装。

若者は自転車でのんびりペダルを踏んでいる。運河の向こう側には数基の風車が風を受

誂紳士の
川端通り(二七二二九八)



けてゆつくりと廻っていて、この風車を除けば長閑な日本の田園風景と変わらない。1kmほど歩いて右に曲がり、小さな木の橋を渡ると動いている風車があり、近くの川には

家鴨が数羽浮かんでいるのも微笑ましい。

1ギルダーコインを渡し、木戸を通過。木造建物の、一人しか登れない急階段を4階ぐらいまで上がると屋根裏が頭につかえるぐらい、風車の心臓部に到着。歯車も何もかも全て木造で、木の温もりが何とも嬉しい。水車と錯覚を起こすぐらい力強く廻転し、汗だくの身体に小窓から逆に風車の風が勢いよく吹き込んで涼しい。狭い階段は上がつてくる人待つの一方通行。オランダでも19基の風車が並ぶ風景は壮観で、この「キンデルダイク」だけ。干拓地排水用として、1725～1761年にかけて造られたもので、羽のスパンは最大で28mもある。

もう集合時間だが、風車の前で記念撮影(16頁写真)。急ぎ足でバスが待っている近くの売店に立ち寄り、喉が渇くのでそれぞれにドリンクを、アイスクリームを、そしてビールを求めバスに走り込む。今日の行程が一番長く、朝8時にアムステルダムを出発し、ベルギーのゲントまで約240km。窓から眺める風景は、

国土の3割しか平地がない日本のようにすぐそこに行けば山が見える場所はなく、全て平野で何処までも広がる緑いっぱいの牧草地が右にも左にも、白に茶柄の牛がのどかに草を食んでいる。

私は一番前の座席なので良く判るが、添乗員の松田一美さんは3年振りに此のコースについたと言っていた。運転席の右隣の一段低い所からマイクで説明しているが、長距離運転のドライバーが退屈しない為にいつも何か話しかけて談笑しているのは良い事だが、肝心のガイドの説明はよろしくない。顔も見えず、しゃべりに抑揚が無く、上から視くとガイド誌を見ての棒読みなので暫く経つとみんなは昼寝タイムに入る。

何時の間にか国境を越えベルギー領内へ。ベルギーの国土は3万1千平方kmで四国の約一・五倍、人口約1千万人。ヨーロッパのほぼ中心部で北はオランダ、東はドイツ、ルクセンブルク、南はフランス、そしてドーヴァー海峡を僅かに隔ててイギリスと、小国ベルギーは四方を各国に囲まれている。

国境近くのアントワープは世界有数の貿易都市でベルギー第二の都市でもある。有名な「フランダーズの犬」の舞台で、主人公ネロ

少年と愛犬パトラッシュの悲劇の物語だが、この街も通過するだけ。花の都市と呼ばれる中世からの街、宿泊するゲントに到着。が、予定のホテルが突然変更されていた。

明日行くブルージュとはライバルで、11〜14世紀と16世紀頃に織物工業が栄え、今でも繊維産業が盛んである。

6月28日(木)。ゲントから50km足らずのブルージュに到着。ブルージュは橋という意味。50以上の橋が架けられた「水の都」で北のヴェネツィアとも呼ばれている。昨年イタリアのヴェネツィアに一泊したが、規模は大きいが人ばかりで騒々しさだけが記憶に残る。

誂紳士のタケハラ
川端通リ(二七)二九八一

さいたま市から7年振りに参加された中田さんは四、五年前に朝日新聞の記者に同行しフランスのミッテラン首相

建物の道路を歩く。中世には港だった処を水門で仕切って出来た「愛の湖公園」には白鳥が優雅な姿を見せている。



世界的に有名なブルージュの優美なボビン・レース編みもこの特産品である。マルクト広場から少し歩くと、ブルフ広場で観光用の馬車が10数台が整然と並ん

ぐらいのモーター付き遊覧船が到着、降りる人と交替で乗り込む。船は静かに進む。カリヨン(鐘)の音を響かせる高い鐘楼が正面に見え、川岸には日本の旅行者らしい人が熱心にのんびりと絵を画いている。船長の生のガイドと交替で、日本語のガイドテープが流れる事には感心する。ひときわ高く聳えるベルフォルトの塔も直ぐ近くに、35分間の短い船旅も終わる(17頁右写真)。もう少しゆっくり観たいブルージュを出発。昨夜宿泊した50km地点のゲントを通過。



の葬儀に出かけられた時、序でにブルージュに立ち寄りその美しい街並みに感動した話しをされていた。バスから降りると真っ赤なシャツに黒のストラックスでメガネをかけた現地的女性ガイドが迎えてくれた。今朝は爽やかでひんやり涼しく、緑に包まれた白のペギン会修道院は静寂そのもの。楡の木立も美しく、赤レンガの続く

でいる。中央に僧侶が十字架を持つ像の建っているレンガの橋を渡り観光船乗り場へ。暫く待っていると20人乗り

はNATOの本部が設置され、EU(欧州連合)の主要機関が置かれ、欧州の首都というべき役割を担った人口120万の古

都である。

12世紀からブリュッセルの政治、経済の中心となってきた広場、それがグラン・プラスで四方に豪華な金箔をふんだんにちりばめたバロック建築、ゴシック建築で囲まれている。市庁舎、王の家、パン屋、大工、染物屋、洋服屋等のギルドハウスが集結し、ここを観るだけでも一日かかりそう。

丁度ブリュッセル警察の防犯大会の当日で、オートバイの編成部隊のデモンストレーションや曲芸まがいのショーに暫し見とれる。グラン・プラスの直ぐ近くに「小便小僧」の像がある。1619年、彫刻家ジェローム・デュケノワが作成。1747年、ルイ15世の兵士がこれを盗み出し、王はその償いに小便小僧に着せる立派な宮廷衣装を贈ったという。それ以来世界各国から様々な衣装が贈られ、600着以上の衣装は王の家(市立博物館)に展示されている。

然し、衣装を着けた「小便小僧」より、やはり裸の像のほうが可愛いって親しみやすい感じである(17頁左写真)。

Ⅱ 以下次号 Ⅱ